

社会的情報システム論集

ネットと組織・社会・信頼

1992 - 2008

はじめに

I. 社会的情報システム論 ネットを内包した社会

1. 社会的情報システム論の射程と専門家（集団）の役割, 2003
2. 「IT化」によって自覚される社会関係と対称性, 2004
3. 情報システムと構成する技術と倫理, 2005
4. 第1回語るべきはITではなくISである, 2003
5. 第2回情報システムにまつわる人の問題, 2003
6. 第3回情報は誰のものか, 2003
7. 第4回求められる専門家（集団）の機能と役割, 2003
8. 「安心安全な社会制度における真正性の考察」, 2005
9. 携帯電話コミュニケーションを考えるための考察, 2006
10. インターネット技術に媒介された教室のインターラクション, 2001
11. Web2.0的ユーザとはなにか, 2007
12. 電子書籍の可能性, 2004
13. 「考え方の教育」について考察するための覚書
-行為とコミュニケーションの視点から-, 2008

II. インターネット黎明期 ネットに遭遇した組織

14. MEMOREX TELEX VM網とINTERNETとの相互接続, 1992
15. 電子メールで実現する生産性向上, 1993
16. 柔軟な情報システムを実現するインフラの満たすべき要件
-ホスト-LAN、LAN間接続をめぐって, 1995
17. 一人一台」時代の基幹システムとしての電子メールを考える, 1996
18. 電子メディア・コミュニケーション・モデルの検討 -リアリティの源泉である相互作用過程に注目して, 1998
19. イントラネットと企業組織, 2000

III. IT社会の自治体と住民、PKI ネットを介した信頼

20. 認証要素と認証関係で考える本人認証の仕組み 2005
21. IT化が顕在化させた信頼関係の不在（IT社会の自治体と住民） 2004
22. ユーザ主権成立の条件（IT社会の自治体と住民：後編） 2004

はじめに

この私家版「社会的情報システム論集」は、私、藤本が、メモレックス・テレックス時代から作新学院大学での教員時代を通じて、様々な媒体に書いてきたものをまとめたものです。

時期的には、都立大学の大学院で修士課程をおえて、復職した時からはじまります。最初の大事件はインターネットとの遭遇です。そして、2007年までに書いたものを並べてありますが、この時期は、住基ネットが稼働し、ネット上の自分とはなにか、ということが議論されていました。

2020年3月に、作新学院大学を定年退職した時に、同時に研究室を閉室しました。その時は、もう、この分野を振り返ることもないだろうと、集めた文献・資料のほとんどを、同僚、後輩にひきとつていただき、誰も使わないだろうというもの（大量にありました。）は施設課の手を煩わせて廃棄処分いたしました。

2015年に『対応分析入門』という翻訳本を刊行してから、自分の研究領域としては、社会調査法、統計学、を選んだつもりでした。科研費も採択されましたので、定年退職後は、その分野で成果をだそう、という決意とセットになった「廃棄」「譲渡」でした。

ところが、定年退職後に国立情報通信研究機構（NICT）でデータ分析のお手伝いをするようになり、さらに、情報倫理に関する科研のメンバーに参加させていたいたり、また、情報セキュリティ関連の研究に参加させていただいたりするようになりました。私の役割は、データの分析なのですが、それを適用する場は、ITや情報セキュリティであったのです。

これは、考えてみれば当然でした。2015年以降は「対応分析」という分析手法の研究を中心にやってきたとはいえ、その分析手法を適用するのは、具体的な社会です。その具体的な場として、会社員時代からかかわってきたIT、情報セキュリティが無関係なわけがありません。

こうした経緯もあり、内容的には心許ないものであるということではあるのですが、どんなことを考えてきたのかをまとめて「論集」にして読んでいただくことをしようとこの論集を私家版として製本することとした次第です。

エンジニアとして会社員を10年勤めたあとで、大学院にいき、そこで、ブラウザ登場以前のインターネットに触れ、そのあと、ブラウザ・インターネットに遭遇する、という大変革の時期を、情報システムを構築する側で経験させてもらいました。そのころに書いたものなど、読み返しますと、当時のドキドキ、ワクワクが蘇ってきます。

そんなこんなをまとめてみました。忌憚のないご意見、いただければ幸いです。

なお、勤務先であった、メモレックス・テレックスの先輩、同僚の皆さん、また作新学院大学で「情報基礎論」「情報システム論」を受講した学生の皆さん、津田塾大学の「情報と社会」「情報と職業」「情報社会と情報倫理」を受講してくれた学生のみなさんとの出会いなしには、これらの論文は書けませんでした。いまさらではありますが、記して感謝いたします。ありがとうございました。

2025年12月

藤本一男
kazuo.fujimoto2007@gmail.com
<https://419kfj.sakura.ne.jp/db/>

社会的情報システム論

ネットを内包した社会

ここにまとめた 12 編の論文は、作新学院大学に勤務していた初期の段階（2002 年～）で執筆したものです。「2000 問題」も一段落して、情報システムのセキュリティが全国的なテーマになっていました。

ブラウザ・インターネットの誕生（1993 Mosaic, 1995 Windwos95）から 10 年近くがたち、ネットが完全に社会の一部になってきました。そのころの雰囲気は、情報系の研究者は、サイバースペースをつくっているのは自分たちだ、と考え、社会学の研究者は、ネットを内包した社会をどう考えていけるだろうか、と考えていたと思います。そんな時期に書いたものです。

この時期は、弁護士の牧野二郎先生が主宰する DDTF（電子署名・電子認証シンポジウム実行委員会）にも参加させていただいた時期もあります。

書誌情報

1. 社会的情報システム論の射程と専門家（集団）の役割, 2003, 『作新学院大学人間文化学部紀要』第 1 号, 17_32
2. 「IT 化」によって自覚される社会関係と対称性, 2004, 『作新学院大学人間文化学部紀要』第 2 号, 1-11
3. 情報システムと構成する技術と倫理, 2005, 『作新学院大学人間文化学部紀要』第 3 号, 17-28
4. 第 1 回語るべきは IT ではなく IS である 2003, 『サイバーセキュリティマネジメント』vol4, No40, 30-33
5. 第 2 回情報システムにまつわる人の問題 2003 『サイバーセキュリティマネジメント』vol4, No41, 30-34
6. 第 3 回情報は誰のものか 2003, 『サイバーセキュリティマネジメント』vol4, No42, 34-38
7. 第 4 回求められる専門家（集団）の機能と役割 2003, 『サイバーセキュリティマネジメント』vol4, No43, pp49-53
8. 3.3 「安心安全な社会制度における真正性の考察」『デジタルコンテンツの真正性認証に関する 調査研究報告書』, 2005/03, 財団法人デジタルコンテンツ協会
9. 携帯電話コミュニケーションを考えるための考察, 2006, 『作新学院大学人間文化学部紀要』第 4 号, 1-14
10. インターネット技術に媒介された教室のインターラクション, 2001, 『社会情報』札幌学院大学, Vol11, No1 139-147
11. Web2.0 的ユーザとはなにか, 2007, 『社会情報』札幌学院大学, Vol16, No2 pp193-208
12. 電子書籍の可能性, 2004, 『GYROS』9 号「特集：書物と電子書籍」, 勉誠出版, 62-71
13. 「考えさせる教育」について考察するための観書－行為とコミュニ ケーションの視点から－, 2008, 情報処理学会 SIG-IS-103, 研究報告, 101-107

インターネット黎明期

ネットに遭遇した組織

世間で「インターネット黎明期」というと、WIDE プロジェクトのみなさんの活動などが想起されると思いますが、ここに集めたものは、企業システムの中でインターネットとの遭遇はどのように見えていたのかを書いたものです。

教育休職を取得して大学院で社会学を学んできたのは、1990 年から 1992 年。社内では、NetWare による社内システムの「革命」が進行し、ビジネス面でも、これからは IPX/SPX の時代だ！という空気が溢れておりました。

そこに、大学でインターネットに触れてきた私が、これからは、TCP/IP の時代なのではないですか、というと、あれは 80 年代のプロトコルだと言われる始末。インターネット技術の企業内展開は面白くないですか、と提案すると、あれば学者のおもちゃだ、とも言われてしまっつることもありました。

その後、ブラウザ・インターネットが登場、普及することでその空気は一変するのですが、そうなる前に私が米国のエンジニアの同僚と実験していたのが、IBM の VM/CMS の VMnote(メール)を、インターネットに接続するということでした。米国 MEMOREX でも、インターネットってなんだ！をあれこれ調べているエンジニアはいたわけで、そんな人たちとこの VM/CMS のメッセージ機能をつかって、実験をしてました。これは面白かったです[13]。

また、NetWare LAN で cc:Mail というメールシステムが稼働していましたが、導入当初は、「社内電話」でしかなかったわけです。しかし、業界は Lotus Notes がインターネット対応を宣言をしたり、インターネット対応が当たり前の動きになってきました。

そうして、メールも社内のみならず、社外、それも、世界中とつながっていきます[16]。今では当たり前の光景ですが、これもわくわくドキドキする光景でした。

のこと、雑誌の記事で、IBM のメインフレーム（大型コンピュータ）を TCP/IP の環境に繋ぐためのあれこれを書いたりしております。

更には、そうした社内ネットワーク化が進行すれば、人的リソースの管理が重要になると考へて、x.509、LDAP、といったディレク

トリサービスについての記事を書いたりもしております。日経
BP のサイトなどで読めると思います。

書誌情報

14. MEMOREX TELEX VM 網と INTERNET との相互接続,1992,技術レポート、メモレックス・テレックス,1-8
15. 電子メールで実現する生産性向上, 1993, 社内公募論文,メモレックス・テレックス,1-9
16. 「柔軟な情報システムを実現するインフラの満たすべき要件-ホスト-LAN、LAN間接続をめぐって」 1995,情報
処理学会 SIG-IS、53-8, 43-48
17. 「一人一台」時代の基幹システムとしての電子メールを考える 1996, 『JUAS 通信/情報システムフォーラム』
pp28-31
18. 「電子メディア・コミュニケーション・モデルの検討-リアリティの源泉である相互作用過程に注目して」 1998,情
報処理学会 SIG-IS、69-5, 31-38
19. 「インターネットと企業組織」,廣井脩・船津衛編『情報通信の社会心理』北樹出版,2000,94 - 112

IT 社会の自治体と住民、PKI

ネットを介してさぐる信頼

ここに収録したものは、2005 年の住基ネット稼働を前後して、ネット上で「自分」というものはどのように確認されるのかを考察したものです。

先に [4]～[7] で情報システムと人の問題を検討していますが、それを踏まえて、情報システムを介在させた自治体と住民の関係について考察しています。技術的なコアは、PKI（公開鍵暗号方式）です。

なお、このセクションについては、掲載誌が「縦書き/右開き」になっていたため、後ろからのページ割り付けになっていること、ご了承ください。

書誌情報

- 20.認証要素と認証関係で考える本人認証の仕組み,2005,『サイバーセキュリティマネジメント』pp38-42
- 21.IT 化が顕在化させた信頼関係の不在 (IT 社会の自治体と住民) , 2004 『サイバーセキュリティマネジメント』11 月号,pp49-52
- 22.ユーザ主権成立の条件 (IT 社会の自治体と住民 : 後編), 2004 『サイバーセキュリティマネジメント』12 月号,pp52-56